

Title	「歴史学の実験室('laboratory of history)」：ロンドン大学歴史学研究所の軌跡
Sub Title	"The history laboratory" : A. F. Pollard and the development of the institute of historical research
Author	仲丸, 英起(Nakamaru, Hideki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.1/2 (2005. 9) ,p.179- 197
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「歴史学の実験室 (Laboratory of history)」

——ロンドン大学歴史学研究所の軌跡——

仲丸英起

ロンドン大学歴史学研究所 (Institute of Historical Research) が一九二二年七月八日にその産声を上げてから、既に八〇年以上の歳月が経過した。この間歴史学研究所は様々な局面における苦難を克服し、現在もなおイギリス国内のみに留まらず、国際的な歴史学研究所の最重要拠点としての位置を占め続けている。特に我が国では戦後史学におけるイギリス史の地位が極めて高く、数多くの日本人研究者が歴史学研究所を利用して⁽¹⁾いる。また近年ではイギリス・日本歴史学者会議も開催されるなど、ますます認知度が高まってきている。ところが歴史学研究所自体の沿革に関しては、日本ではこれまでほとんど紹介されていないのが現状である。本稿は主として開設に至るまでの経緯および草創期の歴史学研究所の軌跡を概観し、ささやかながら歴史学におけるその意義付けを試

みようとするものである。

歴史学研究所の創設を語る際、欠かすことのできない人物がアルバート・フレデリック・ポラード (Albert Frederick Pollard) である。いやむしろそれはポラードについて語るのと同義であるといっても過言ではない。それ程ポラードが研究所の創設に果たした役割は大きく、計り知れないものであった。

ポラードは一八六九年、ウエズリ派の牧師であるヘンリー・ハインズ・ポラード (Henry Hinds Pollard) の次男として生まれた。父ヘンリはワイト島で治安判事、地方協議会副議長を務めた人物でもあり、盛期ヴィクトリア時代のアッパー・ミドルクラスの典型とも言える人生を送った。⁽²⁾ポラードはポーツマスポーツマスのグラマー・スクール、オックスフォード大学ジーザス学寮と順調に学歴を重ね、

一八九一年に歴史学の優等卒業試験で第一位を獲得した。その後フェローには就かず、一〇年あまりの間大学から離れて生活を送ることになる。

ロンドンに出てきた彼は、『国民伝記辞典』(Dictionary of National Biography)の副編集者の職を得る。四年には結婚したポラードにとつて、年収二〇〇ポンドとはいえ定期的な収入を得ることは当面の生計を立ててゆくために必要であつたらう。しかしそれよりもここで重要なのは、かのヴァージニア・ウルフの父にして初代編集長スティーヴン (L. Stephen)、二代編集長リー (S. Lee) の厳密な執筆要項が次世代を担うことになる歴史家たちに厳しい訓練の場を提供したことである。実際この辞典の目的になつた叙述を行うためには、それまでイギリス国内で主流をなしていたアマチュアの域を出ない歴史研究ではなく、アカデミックな方法が必要とされたのである。タウト (T. F. Tout)、ファース (C. H. Firth)ら新進気鋭の歴史家たちと並んで、ポラードもこの商業的な出版社の事務室で厳密な歴史学の薰陶を受けたのであつた。後に彼の高弟となるニール (J. R. Neal) に対し、この事務室で得た技術とその閉鎖に伴う文献の散逸への無念さを語っているのを見ると、この事

務所に代わる新たな歴史研究の場を持ちたいという意向がこの時点で既に働いていたのかもしれない。

こうした中一九〇〇年に処女作である『撰政サマセットのもとにおけるイングランド』⁽⁵⁾を、一九〇二年には短編ではあるが二〇世紀半ば過ぎまで標準的な伝記であり続けた『ヘンリ八世』⁽⁶⁾を公刊し、ポラードはテューダー朝研究者としての地位を確立した。そして一九〇三年には新たに創設されたロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジにイングランド国制史講座の非常勤講師として就任した。その「ロンドン大学と歴史研究」と題された就任講義において、ポラードは歴史学を専攻しようとする学生数の少なさと並んでスタッフの不足も指摘した。さらに彼は次のように述べた。

「次にかなり実現の可能性がある話題に移りたいと思います。すなわちロンドンにおける大学院生向けの歴史研究学校の設置についてです。当地ではそれぞれの専門分野で有望な若手研究者たちが奮闘しています。また当地はヨーロッパ全土において他のいかなる都市も誇り得ない利便性を独占しています。この点に関してはそのもも現在のところ競争相手は存在しません。イギリスの大

学には正真正銘の歴史研究の学校が皆無だからです。またそうした競争相手は存在したとしてもおおよそ問題にならないでしょう。なぜならロンドンが享受している格段の有利さのために、もしそうした施設が思慮に富んだものであれば、容易にライヴァルを引き離すことが可能となるからです。学部学生はそれぞれの地方で研究を行えばそれで事足りるかもしれません。しかし近代史を研究しようとする大学院生はロンドンに通わざるを得なくなります。彼らの研究が他の国々が達成している水準に、また我々が現在要求している水準に到達するとすれば、当地の国立公文書館、大英博物館、その他政府部に大量に保存されている史料を、その研究の基盤としなければならぬからです。」⁽⁷⁾

こうした言葉が当時どれほど意義を持つものであったか、現在では想像するのも困難である。厳密な史料批判に基づく歴史研究が開始されたのは一九世紀のドイツにおいてであった。「歴史学の父」ランケは、歴史家は己を滅して史料自身に歴史を語らせるべきであるとし、ドイツ、フランスではこうした考え方が主流となっていた。他方同時代のイギリスでは、歴史に対する考え方は

これとは全く異なったものであった。一九世紀前半のイギリスを代表する歴史家マコーリー (T. B. Macaulay) の史料へのアプローチはむしろランケと正反対であり、彼が史料を利用するのは、あらかじめ自分の知性や想像力を働かせて到達していた結論をいつそう強化したり肉付けしたりするためだけに過ぎなかった。⁽⁸⁾ こうした「文学的」歴史の伝統はイギリスでその後も長らく引き継がれ、歴史学の専門職業化がようやく進展し始めるのはドイツから遅れること約一世紀が経過した一九世紀末のことであった。一八七一年にはオックスフォードに、一八七三年にケンブリッジに、それぞれ歴史学科が設けられている。とはいえ当時の大学における歴史学はあくまでも一般教育の一部として位置づけられていたに過ぎず、歴史それ自体のための研究は理解を得られなかった。このような状況の中、イギリス国内で初めて「科学的」歴史に先鞭を付けたといえるスタッブス (W. Stubbs)、ガードナー (S. R. Gardiner) が一九〇一年、一九〇二年と相次いで世を去り、イギリス史学界は世代交代の時期を迎えていたのである。したがって一九〇四年というのはまさにイギリスで歴史に対する姿勢が変化し始める過渡期に当たっているものであり、ここでポラードが表明し

ていたのは、伝統的な歴史研究の方法に対する苛立ちと、そうした状況を自らの手で変革してゆこうという強い意志であった。

こうして公的に歴史研究のための機関を設置する必要性をポラードは訴えたのであるが、もちろんその構想を即座に実行に移せたわけではなかった。この就任講義の直後、彼が奔走したのは「歴史協会 (Historical Association)」の結成である。この協会の設立に当たってポラードが果たした役割と彼の意図は歴史学研究所と直接の関わりは持たないものの、その設立を考える際にも大きな意義を持つので、次にこの点に関して簡単に見てゆくことにしたい。

一九〇六年以前にも、歴史教師が互いに集う会合はリヴァプールやマンチェスターといった地域に見られるように地方レベルでは存在していた。こうしたネットワークをイギリス全土に拡大しようとしたのが、ロンドン・デイ・トレイニング・カレッジの教師であったライド (R. Reid) とハワード (M. A. Howard) である。彼女らはポラードに助力を仰ぎ、その意図に賛同したポラードがさらに志を同じくするファース、タウトにも協力を呼びかけた。こうしてライドとハワードが行動を起こして

から半年も経たない一九〇六年五月一九日に、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジで第一回の会合が開催される運びとなった。⁽⁹⁾

ここで注意すべきであるのは、発起人とポラードの意図の相違である。ライドとハワードが専ら関心を寄せていたのは初等あるいは中等教育における歴史教育であり、具体的には教科書の改善、図版等が豊富に盛り込まれた副教材の準備等であった。こうした観点からこれらの諸問題を討議し、情報を交換するための組織の必要性を促したのである。だがポラードが第一回の会合の閉会演説で述べたのは次のような言葉であった。「歴史は各大学で適切に理解されるべきであり、また歴史は各学校で適切に教授されるべきです。⁽¹⁰⁾」ここでは力点が前者にかかっているのは明らかであり、ポラードの考える協会がハワードらの意見とはかなり異なっていたことが窺える。すなわちポラードは、大学における歴史学教育の充実が初等あるいは中等教育における歴史教育の向上にも役立つ、全国的な歴史教師のネットワークの設立が歴史学全体に対する一般的な関心を惹くであろう、と考えていた節がある。ここには先の就任演説にも表れ、さらにこの後歴史学研究所設立の動機ともなつてゆく、ポラードの

歴史に対する熱い情熱のごときものが感じられるであろう。ともあれ、その後も会議の場所に自宅を提供したり、ファースを初代会長に、タウトを二代目の会長に就任させたり、雑誌『歴史 (History)』を買収して再刊したりするなど、歴史協会のために積極的な活動を続けていたのである。⁽¹¹⁾

このようにして歴史協会の立ち上げには成功したものの、ポラードが夢見ていた研究所の設置は遅々として進まなかった。もちろん活動的な彼はただ手をこまねいていたわけではない。⁽¹²⁾一九一〇年には大学内に歴史学研究委員会を設置し、⁽¹³⁾それを橋頭堡にしようとした。しかし旧態依然とした大学当局の姿勢、ロンドン大学に特有の機構の複雑さ、⁽¹⁴⁾そしてなりよりもヴィクトリア朝時代の歴史に対する考え方が依然として圧倒的に優勢であった時代風潮が、ポラードの理想の実現を妨げていたのである。そうしている間に第一次世界大戦が勃発してしまい、ますます彼の目標達成は困難になったかと思われた。

だが大戦の開始と時を同じくして、ポラードはユニヴァーシティ・カレッジで大学院生向けのセミナーを、さらにはロンドン中の歴史家が集う木曜夜の集いを主催し始める。⁽¹⁵⁾この集いは時にかなりの人数を集め、当時活動

していた歴史家の孤独を克服するのに大いに役立った。このセミナーと集いは二〇世紀初頭のイングラッド歴史学会にとって大きな革新であり、広く他の大学でも取り入れられることとなった。これは後の研究所の主要な機能である歴史家同士の交流を先取りする形で実現したのであり、研究所の設置に先鞭を付けたのは間違いのない。

このような活動に顕著に表れているように、戦時下のロンドンにおいてさえポラードの熱意は衰えを知らなかった。戦争が終結すると、彼はいよいよ本格的に研究所設置の準備を開始する。『ロンドンにおける歴史学研究の要請』と題された小冊子の中で、彼は改めて研究所設置の意義を論じている。

「今日まで、イギリス帝国内のいかなる大学も歴史学、政治学、法律学の領域で大学院における研究の専門化を十分に進めてはこなかった。戦争によりこのような専門化の国家的重要性は高まってきている。我が国においては、歴史的知識と経験に照らして今日的課題に立ち向かうことを目的として国立歴史事業局 (a Board of National Historical Service) を即座に設置したアメリカ合衆国に倣う、というような可能性は周知のようにほとん

ど見出されない。そのような国家的組織が欠如している第一の原因は、国家調査の目的に転用しうるような、しかるべく組織された歴史学部がイギリスの大学に存在しないという点に求められる。したがって国家に可能であるのは、多かれ少なかれ行き当たりばったり⁽¹⁶⁾に個々の歴史家を利用し、個人が独力で行わなければならない業績に依存することに過ぎない。この国家的問題点の解消は、明らかに国家再建における一項目として模索されるべきであり、そしてそれが達成されうるか否かは、ロンドン大学による行動の有無に大きく依存しているのである。⁽¹⁶⁾」

現在から見ればいささか大仰に感じられるこの主張は、しかし当時の知識人が共有していた危機意識が具現化されたものであると言える。「西洋の没落はまず第一に、これに相応しているギリシャ・ローマの没落と同様に、空間的にも時間的にも範囲の限られた現象であるが、同時に一つの哲学的主題である」とオスヴァルト・シュペングラーが述べた『西洋の没落』第一巻が世に出たのも一九一八年のことであった。⁽¹⁷⁾第一次世界大戦という人類史上類を見ない惨劇に直面して、ヨーロッパの知的エリ

ートたちの間では自ずと歴史に対する意識が高まっていたのである。既に二〇年近く前から歴史学研究所の設置を求めていたポラードが、この問題を国家レベルで論じることになったのはむしろ当然であった。さらにポラードはこの小冊子の中で、専門的な歴史研究に必要な書籍やマニスクリプトといった史料の充実、教員と大学院生との協同、海外からの大学院生の受け入れ等の重要性を具体的に挙げている。

ここに至ってポラードはついに大学当局を動かすことに成功し、「高度な歴史学研究のためのセミナー」創設に向けて二万ポンドの寄付を集めるための委員会 (Appraisal Committee) の設置が認可された。当初大学当局は大英博物館近隣の二、三棟の建物を研究所に転用する予定であったが、それでも借地権、家具調度品、さらに史料・書籍等を購入するのに二万ポンドは必要であると見積もられたのである。委員会は一九二〇年四月二十九日の『タイムズ』を初めとする各紙に広告を掲載し、⁽¹⁸⁾寄付を募ることにした。

他方同年初頭に、ロンドン大学は大英博物館裏手の約十一・五エーカーの土地 (ブルームズベリー・サイト) を提供する旨の打診を政府から受けていた。この土地を

所有していたのはベッドフォード侯爵であったが、侯爵から政府が買い取った上で大学に提供しようとしたのである。この申し出に対して大学内部ではかなり議論が戦わされたようである。⁽¹⁹⁾あくまでも研究所を大学の機関としたかったポラードは、この敷地内への研究所の設置を強く主張した。

ところが肝心の寄付は思うように集まらなかった。寄付金の合計はその年の夏までで僅か四千ポンドに過ぎなかった。絶対的な資金不足を前に大学当局は再び難色を示すようになる。この財政的危機を救ったのがパウア (J. C. Power) であった。パウアはポラードの富裕な隣人であり、ポラードの意志に感銘を受けて以前から五千ポンドの寄付を申し出ていたのであるが、この額を二万ポンドに増額したのである。⁽²⁰⁾それでも恒久的な建物を建設する費用には及ばなかったが、ポラードも時の教育大臣にして歴史家仲間でもあったフィッシャー (H. A. L. Fisher) から無料での土地貸与の約束を取り付け、なんとか十一月には大学当局の最終的な認可にこぎ着けた。臨時の研究所施設の建設は即座に開始され、外見が第一次大戦のイギリス軍の兵舎に似ていたことから、「軍隊の仮兵舎 (the army huts)」とも呼ばれるこの建物は、

「歴史学の実験室 (laboratory of history)」

翌年の夏までに完成を見た。⁽²¹⁾そして一九二二年七月八日、研究所の開会式が執り行われ、フィッシャーが演説を行った。この模様は翌日の新聞各紙でも報道された。こうしてポラード積年の夢であった「歴史学の実験室」はついに実現したのである。国制史講座の就任演説でその思いを語ってから、実に一八年の歳月が流れていた。

ここで発足当初の研究所の組織について簡単に触れておこう。研究所の事務全般はスタッフから構成される運営委員会が執行した。ただし研究所専任の教授陣は費用面への配慮および各カレッジの教員がセミナーを主催するという理念から、ポラード以外には置かれなかった。⁽²²⁾秘書 (Secretary) にはナラロット (I. F. Naracott) が、名誉司書 (Honorary Librarian) にはデーヴィス (E. J. Davis) が就任した。デーヴィスはロンドン史に関する論文も著しているが、やはり研究所創設に果たした役割が注目されるべきであろう。彼女は建物、家具、不動産の詳細に関してほとんど全てを一人で統括したのである。ポラードの理念を事務手続きの面で支えた最大の貢献者は間違いなく彼女であり、「ミス・デーヴィスの研究所」⁽²³⁾という言葉は紛れもなく真実の一端を表している。次に初代研究所の内部構造について見てみたい。⁽²⁴⁾入り

口をくぐると玄関の左側が守衛の事務所、右側が名誉司書の事務所になっていた。小さなホールを抜けると廊下が左右に続き、右手の暗い廊下はクロークルーム、社交室等へつながっていた。左手の廊下をゆくと、右手には英国国際問題研究所が借りている五部屋があり、左手には九つの研究室があった。すなわち入り口からヨーロッパ各別別の研究室が続き、ヨーロッパ全般を扱う中央の最大の部屋を挟んで、海事史、軍事史の研究室等が並んでいた。⁽²⁵⁾ 廊下の突き当たりはイギリス・アイルランドの研究室であり、これが研究所内で最大の部屋であった。

この部屋の右手には併設してロンドン史と古文書学の研究室が置かれていた。イギリス・アイルランドの研究室を抜けると、ポラードの部屋とページ (W. Page) を主幹とする『ヴィクトリア女王記念州史』(Victorian County History)⁽²⁶⁾ の部屋が左右に配置され、さらにその奥に植民地関連の研究室が置かれていた。当初の建築計画ではこの部屋が末端であったが、その後さらにアメリカ史の研究室が追加された。

こうした部屋の配置について、アナール学派の創設者の一人であるマルク・ブロックの言葉を引用してみよう。開設初年に研究所を訪れたブロックは、『歴史学雑誌』

(Revue historique) に研究所に関する寄稿を行っている。研究所の簡単な紹介とそれが歴史学にもたらす貢献について述べた後、彼は何点か苦言を呈している。「次に、(この研究所には) 意図的に空白のままにされた領域が幾つか存在する。古典古代、いわんや古代オリエントは故意に除外されたようである。この研究所で提示される歴史は、アングロ・サクソン時代に始まるのである。ヨーロッパの過去における同様の断絶は、歴史的教養にとって必然的に危険を伴うものとなろう。……文献学上の理由で、極東やイスラームの国々の歴史もこの研究所では研究されないようであるが、しかし植民地の歴史をその支援無しでどのように処理するのだろうか。補助的な学問の内、ロンドン大学その他の機構においては教育されている考古学や言語学にはいかなる場所も与えられていない。有形のモニュメントもまた史料なのであり、また今日歴史家を名乗る者に対しては少なくとも基礎的な言語学の教育が不可欠である。歴史研究を旨とする学生に以上の事を想起させる必要性がいつの日か必ずや認識されるであろう。」⁽²⁷⁾ ここに見られるブロックの主張には、歴史学と人間諸科学との総合を試み、比較史を援用して全体史に至ることを目的とした彼の思想が良く表されて

おり、興味深いものがある⁽²⁸⁾。逆に言えば、専ら国家別に研究室を配置するに留まったポラード、あるいはイギリス史学界の限界が露呈されていると見ることもできるであろう。

過労のためかデーヴィスは一九二三年に体調を崩し、名誉司書の務めを果たせなくなった。そこで運営委員会は秘書と司書の職を統合して次長 (Secretary and Librarian) という職を新設した。初代次長として招かれたのがミークル (H. W. Meikle) である。ミークルはエディンバラ大学で文学博士号 (D. Litt.) を取得した研究者であり、その専門性が買われたのであった⁽²⁹⁾。このミークルが次長であった四年の間に、研究所は着実に発展を続ける。会員数は倍になり、平均して年に三千冊が蔵書に加えられた。『歴史学研究所紀要』 (Bulletin of the Institute of Historical Research) が一九二三年に創刊され、一九二一年に初めて開催されたイギリス・アメリカ歴史学者会議も継続して行われるようになった。

こうして研究所の事業は順調に軌道に乗りかけたように思われたが、開設から僅か五年後に重大な危機に直面することになる。政府がブルームズベリー・サイトのベッドフォード侯爵への再売却を決定し、大学当局も不承

「歴史学の実験室 (Laboratory of history)」

不承ながらこれに同意してしまったのである。この決定が発表されるまで、研究所には何も知らされていなかった。一方的な通告に対して憤慨した歴史家たちは、各新聞に連名で、あるいは個人で反対声明を寄せ始める。一九二二年五月二二日付の『タイムズ』紙には、ファース、グーチ (G. P. Gooch)、タウトの名が見られ、六月一日付の同紙にはニールを初めとするマンチェスター大学の教授陣の名が、さらに六月二日、三日付の『モーニング・ポスト』紙にはアメリカ各地の大学教員の名が見受けられる。また研究所の苦境に関する報道は前二紙のみに留まらず、『スコツツマン』 (The Scotsman) 『グラスゴー・ヘラルド』 (The Glasgow Herald) といったスコットランドの各紙、さらには『セイロン・オブザーバー』 (The Ceylon Observer)、アラハバードの『パイオニア』 (The Pioneer)、カルカッタの『ニュー・エンパイア』 (The New Empire) など植民地の新聞にまで及んでいる。このように非常に広範囲からの反響は、研究所が既に保持するようになっていた大きな影響力を示している。当然研究所自身も沈黙していたわけではなく、自己弁護を行っている。『歴史学研究所の嘆願』 (A Plea for the Institute of Historical Research) と題された小冊子で

は、研究所の起源、目的、発展について沿革が述べられた後、政府の計画に対して強い調子で非難が展開されている。「もし政府が研究所の創設およびそれに続く発展を考慮し、研究所の未来に対する保証を道徳的責務であると認識しないとすれば、これまでの寄付と奉仕が無益なものとなり、先に投入された国費も浪費されることになる。そうした事態を許せば、政府が各方面からの批判にさらされるのは必至であり、さらにおそらくは歴史研究のみならず、他の大学政策においても信頼を失墜する結果を招くであろう。」⁽³⁰⁾最終的にこの危機は、主としてロックフェラー財団からの寄付によってブルームズベリー・サイト全体を大学が取得する、という当時の副総長ベヴァリッジ (W. Beveridge) の決定により、回避された。⁽³¹⁾高まりつつあった歴史家たちの研究所の必要性に対する認識が、大学当局、政府を動かした結果であると言えらるだろう。

一九二七年になると、かねてからポラードとの関係があまり良くなかったミークルは研究所を去り、以前からミークルの下で働いていたパスルー (G. Parsloe) が後任に就く。また同時にポラードが正式に常勤の所長となった。彼がその地位にあった続く四年間には劇的な変化

はなかったものの、研究所の発展は確実に続いていった。設置されるコースやセミナーの増加につれて、会員数とその出身大学数も毎年増加していった。こうして彼が理想としていた「歴史学研究のための国家的事業所」(National office for historical research) としての形態を研究所が整えてゆくのを目の当たりにして、ポラードは非常に喜ばしく思っていたようである。⁽³²⁾

しかし一九三〇年にポラード夫人が病を患い大手術を受けた。彼女は一時的に回復したものの、妻の療養に専念するためポラードは教授職と常勤の所長職を辞し、南岸のミルフォードに購入した大邸宅に移り住んだ。その後八年間は名誉所長 (Honorary Director) として二週間に一度研究所に顔を出す形で運営に携わっていたようである。⁽³³⁾そうしている間にも研究所の事業は拡大を続けた。一九三二年には債務超過で出版が滞っていた『ヴェクトリア女王記念州史』⁽³⁴⁾の調査・研究を引き継ぎ軌道に乗せた。また同年にはイギリス文書協会 (British Record Association) の創設や王立歴史学協会 (Royal Historical Society) の再組織にも研究所は力を貸した。さらにイギリス・アメリカ歴史学者会議は引き続き開催され、一九三三年と三四年にはイギリス・フランス歴史学

者会議も開かれるなど、その規模はさらに拡大しつつあった。

こうした中、大学当局は一九三一年からブルームズベリー・サイトに新大学本部を建設するための準備に取りかかる。そして同年にその設計を任されたのがホールデン (C. Holden) である。彼が立ち上げた構想はゴードン・スクエアからモンターギュー・プレースマまでを一続きの構築物にし、あわせて大学の象徴とすべくロンドンで最高の高さを誇るタワーを建設する、というまさに驚くべきものであった。そしてその本部内への歴史学研究所の恒久的設置も決定される⁽³⁵⁾。一九三二年末に開始された建設工事は急ピッチで進められたが、資金不足から一九三七年に計画が変更され、タワーを中心に左右両翼の棟を配置する現在の形体に落ち着いた。タワーと南側の棟、北側の棟のマリット・ストリート側は一九三八年に完成した。北東部の研究所が入る予定になっていた棟はまだ完成していなかったが、南西棟の四階を間借りする形で仮移転することになり、同年のイースター期間中に引越が行われた。その後従来「軍隊の仮兵舎」はパークベック・カレッジ建設のため取り壊された。

丁度研究所が大学本部へ移る頃から、ポラードと運営

委員会との確執が始まったようである。一九三八年といえば国際情勢がいよいよ緊迫の度を増してきた時期であり、その状況に対処しようとするような常勤の所長が必要である、と運営委員会は考えたのである。暗に引退を仄めかすような委員会報告を目にしたポラードは激怒し、突如名誉所長職を辞任してしまふ⁽³⁶⁾。研究所創設者と運営委員会とのこの不幸な対立は、もちろんポラードの強い個性が多分にその要因となった可能性はあるが、それ以上に戦争を間近に控えた社会不安が背景に存在していたとも言えるだろう。戦時下に対応すべく所長代理に任命されたのは、当時国立公文書館次席管理官 (Deputy Keeper by the Master of the Rolls) の地位にあつた古文書家のフラウア (C. T. Flower) であつた⁽³⁷⁾。フラウアの所長代理就任から僅か三ヶ月後に第二次世界大戦が勃発し、新研究所が入る予定であつた棟の建設は中断されてしまふ。さらにロンドン大学本部の建物自体が情報省に接收されてしまったのである。それでも研究所は数ヶ月の間その機能を維持し続けたが、結局翌年五月頃には少数の職員を残して閉鎖に追い込まれた。追い打ちをかけるように一九四三年には情報省が研究所の図書全てをタヴィストック・スクエアに完成したばかりであつたイギリス医学

協会の建物内へ移動するよう命じ、ブルームズベリー・サイトからの一時移転も余儀なくされた。そしてこれを機に長年研究所に貢献してきたパスルーも次長の職を辞したのである。

だが一九四三年も後半となり戦局が連合国側有利に展開し出すと、研究所にも一条の光が差し始める。一九四四年二月からは移管された図書の使用規制がかなり緩やかになった。運営委員会は戦後の研究所の再建を見据え、それに適任と思われる所長の人選に当たった。その結果白羽の矢が立てられたのは、エディンバラ大学で教鞭を執っていた古文書学者、中世史家のガルブレイス（*W. H. Galbraith*）であった⁽³⁸⁾。ガルブレイスはタウトの在籍していたマンチェスター大学で学生時代を過ごし、その後国立公文書館で記録官補助（Assistant Keeper）を務めた経歴の持ち主であった。こうした点が委員会の目に止まったのかもしれない。若干逡巡したようであるが、ガルブレイスは一九四四年四月に常勤の歴史学研究所所長に就任する。さらに終戦後の一九四六年一月には空白に就任していた次長職にミルン（*A. T. Milne*）⁽³⁹⁾が就き、再建計画が速やかに実行に移されることになった。

怪我の功名と呼ぶべきか、中断されていた大学本部の

建設は情報省の手で再開され戦時中に完成していた。問題は既に六四〇〇〇冊に達していた蔵書のイギリス医学協会の建物内からの再移動であった。「異常に暑く感じられた夏の間、少数の図書館員および事務職員がガレー船奴隷のように働いた⁽⁴⁰⁾」と後にミルンは述懐している。こうした努力もあって予定通り一九四七年九月一日に研究所は再開され、一九四八年二月一三日には公式の開所式が催された。こうして戦争という苦難を乗り越え、研究所はついに安住の地を得たのであった。

これ以降今日まで研究所は順調に発展を続け、その活動は多岐に渡っている。これまでに様々な企画、出版がなされ、もちろん現在も進行中である。しかし本稿ではこうした事業それぞれについて詳細に述べる紙幅の余裕はなく、さらにそれぞれの事業には独立した紹介がなされるべき意義があるように思われる。そこでここでは歴代の所長とその間に行われた主な活動についてごく簡単に触れるに留めたい⁽⁴¹⁾。

一九四八年一月にオックスフォード大学の欽定講座担当教授に就いたガルブレイスの後任として所長に就任したのは中世史家のエドワーズ（*J. G. Edwards*）⁽⁴²⁾である。エドワーズはそれまで三〇年近くオックスフォード大学

のジーザス学寮でフェローの地位にあった人物で、戦前から『ヴィクトリア女王記念州史』編纂に当たって学外者でありながら編集長を務めていた人物であった。エドワーズの時代の主要な活動としては、歴代の聖職禄保有者リストの編纂⁽⁴³⁾と議会史研究の開始が挙げられる⁽⁴⁴⁾。

一六〇年にはエドワーズの後任として古文書学者のウームルド (F. Wormald) が就任する⁽⁴⁵⁾。ウームルドの時代には聖職者と並んで近代における世俗の官職保有者リストの編纂が開始された⁽⁴⁶⁾。その後一九六七年には宗教改革の研究で日本の研究者にもその名が知られているディケンズ (G. A. Dickens)⁽⁴⁷⁾ が、一九七七年には一九世紀の社会経済史が専門のトムスン (F. M. L. Thompson)⁽⁴⁸⁾ がそれぞれ所長職を引き継ぐ。一九八〇年代のトムスンの時代には、首都史研究センター (The Center for Metropolitan History)⁽⁴⁹⁾、現代イギリス史研究所 (The Institute of Contemporary British History)⁽⁵⁰⁾ が設立され、また一九八六年に『歴史学研究所紀要』は『歴史学研究』 (Historical Research)⁽⁵¹⁾ と名を改めた。一九九〇年から一九九八年までは産業革命期の経済分析等で知られるオブライエン (P. K. O'Brien)⁽⁵²⁾ が、一九九八年から二〇〇三年まではキャナダイン (D. Cannadine)⁽⁵³⁾ が所長を務めた⁽⁵⁴⁾。一九

九〇年代に入ると、研究所もメディアの多様化に対応して史料のデジタル化や歴史家とのインタビュを収録したビデオテープの販売⁽⁵⁵⁾など、事業の多角化はさらに拡大の一途をたどっている。

約一世紀前、ポラードは国制史講座就任演説の最後に次のような言葉を述べている。「さて、自分の夢を追求し想像力を働かせることは、若者にとって時に恥辱であるとされています。そうした行為は一般的には非難の対象となるのかもしれませんが、しかし繰り返し恩恵をもたらしてもくれるのです。というのも想像した世界は未来の一つの可能性であるわけですし、夢というのはいつの日か実現するものだからです。」⁽⁵⁶⁾ポラードが夢に見た「歴史の実験室」は、二一世紀を迎え創設者の想像を遙かに超えた発展を続けている。初期の資金難が嘘のように現在では同時に複数の事業が並行して行われ、また積極的にコンピューター及びインターネット技術が歴史研究に利用され始めている。だがこうした事業の多様化や新規媒体の導入は、研究所が創設当時育もうとした歴史探究における本質的技術や知的水準が、これまで以上に広範かつ効率的に研究所によって追求されてゆく事実を保証するものになりこそすれ、阻害する要因とはなり得

ないと思われる。困難な時代を乗り越えて研究所の礎を築いた人々の精神は現代にも依然として生き続けているのであり、人間が過去の探求を止めない限り、今後その価値が減じることは無いであろう。

註

- (1) 一九九四年に初めてロンドンで開催された後、一九九七年に東京、二〇〇〇年にロンドン、二〇〇三年に東京でと開催地を交互に移しながら三年おきに開催されている。第二回までの詳細は木畑洋一「第一回日英歴史学者会議について」(『史学雑誌』一〇四編六号、一九九五年)近藤和彦「第二回日英歴史学者会議について」(『史学雑誌』一〇八編二号、一九九九年)参照。第四回に関しては Kazuhiko Kondo (ed.), *State and Empire in British History: Proceedings of the Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians*, Tokyo, 2003. を参照。
- (2) V. H. Galbraith, 'Albert Frederick Pollard, 1859-1948', *Proceedings of the British Academy* 35, 1950, pp. 257-258.
- (3) ポラードの妻となったのは、オックスフォードの鉄工ウィリアム・ルーシーの娘キャサリン・スザンナである。Galbraith, *op. cit.*, p. 259.
- (4) J. E. Neal, *Essays in Elizabethan History*, London, 1958, p. 234.
- (5) A. F. Pollard, *England under Protector Somerset*, London, 1900.

- (6) A. F. Pollard, *Henry VIII*, London, 1902.
- (7) A. F. Pollard, *Factors in Modern History*, London, 1919, pp. 276-277. 以下述べてはいるものの、ポラード自身はほとんど古文書を利用してはいない。本書に対する批判は J. H. Hexter, "Factors in Modern History", *Reappraisals in History*, London, 1961, pp. 26-44. またポラードの歴史研究の方法論に関しては G. R. Elton, *Studies in Tudor and Stuart politics and government* I, London, 1974, pp. 110-115. 参照。
- (8) J. P. Kenyon, *The History Men*, Frome and London, 1983, p. 85 (今井宏・大久保桂子訳『近代イギリスの歴史家たち』ミネルヴァ書房、一九八八年)。本書は、特に二〇世紀以降について偏向が見られるものの、一七世紀以降のイギリス史学史について翻訳された数少ない通史である。
- (9) H. Butterfield, 'The History of the Historical Association', *History Today* 6, 1956.
- (10) A. T. Milne, 'The Historical Association and its Founders', *History Today* 16, 1966.
- (11) 歴史協会のその後の発展については、前述の二論文の他 Historical Association, *The Historical Association, 1906-1956*, London, 1955; W. M. Medlicott, 'The Historical Association', *Times Literary Supplement*, Jan. 6, 1956. も参照。邦語では大中勝美「二〇世紀初頭イギリスにおける歴史教育——イギリス歴史協会を中心として——」(『日本の教育史学』第四四号、二〇〇一年)に比較的詳

細な紹介がなされている。

- (12) ポラードの行動力と政治的手腕は確かに並はずれたものがあつた。それは研究所設立の活動に限られたことではなく、下院議員選挙への二度の出馬にも表れている(いずれも落選)。またこうした行動に見られる同時代の政治に対する強い関心が、歴史家としての彼を突き動かしていたようである。一九世紀ではなく一六世紀を自身の研究対象に選んだのも、議会の権威を論じようとしたわけではなく、むしろそれを作り出すためであつた。A. F. Pollard, *The Evolution of Parliament*, London, 1926. という著作には彼の自由主義的な立場が明確に示されている。

- (13) Kenyon, *op. cit.*, p. 197.

- (14) 一九八〇年代初頭のロンドン大学についての簡単な紹介が、杉山伸也「ロンドン大学の機構と研究機関」(『海事交通研究』二二集、一九八三年)でなされている。また近藤和彦「ブルームズベリの歴史学」(I) (『UNP』二八九号、一九九六年)にも若干の記述がある。

- (15) 一つの主題に対して共同作業を行う独・仏のセミナー形式に対し、ポラードが採用した形式は学生が教員の指導を受けながら個別研究を行い、週一度の集いでは共通の問題について議論を行うというものであつた。C. H. Williams, 'A. F. Pollard, 1869-1948', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 22, 1949, p. 5. 同じ形式は研究所創設後も継承され、今日でも主要機能の一つとなつている。創設当初のセミナー開講数は二〇に満たなかつたが、二〇〇五年度は四七に達している。なおポラード自身が主催した国制史セミナーのその後については、清水祐司「テューダー・セミナー——テューダー朝研究の一系譜——」(『イギリス史研究』No. 三〇、一九八〇年)を参照。

- (16) A. F. Pollard, *The Claims of Historical Research in London*, London, 1920.

- (17) O. Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*, Wien und Leipzig, 1918. 引用は村松正俊訳『西洋の没落』第一巻「改訳新版」(五月書房、一九八四)、一四頁による。シュペンガーが掲げた反近代主義のモチーフは西洋知識人に大きな衝撃を持って迎えられ、これに対して文化的・政治的側面からヨーロッパの統合を主張する人々も数多く現れた。戦間期におけるヨーロッパの「危機」およびヨーロッパ・アイデンティティー概念に関する最新の研究は、むしろあたり M. Spiering and M. Wintle (eds.), *Ideas of Europe since 1914: The Legacy of the First World War*, Basingstoke, 2002. を参照。

- (18) *The Times*, 29 April 1920.

- (19) N. B. Harte, *The University of London, 1836-1986*, Cambridge, 1986, pp. 188-193. 本書はロンドン大学全体の歴史を知る上で大変有益である。

- (20) パウアを中心とした一九二〇年における動向については J. G. Edwards, 'Sir John Cecil Power, Bart. 1870-1950', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 23, 1950.

- (21) この初代研究所の建物の詳細な建築様式は筆者には知り得ないが、建設が極めて短期間で行われていることや取り壊し時の写真から判断する限り、あまり堅牢ではなかったと思われる。そのためであろうか、開所直後から暖房施設に対する要望が運営委員会に提出されるなど、居住性も良好ではなかったようである。
- (22) 後述するようにポラードが正式に所長 (Director) を称するようになるのは一九二七年以降であり、厳密にはそれまでの期間専任教員は一人も存在しなかったことになる。
- (23) バーカー (E. Barker) がある夕食会の後語ったとされる。G. Parsloe, 'In memoriam E. J. D.', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 19, 1942-43, p. 185.
- (24) G. Parsloe, 'Recollection of the Institute, 1921-43', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 44, 1971, p. 273. を参照。
- (25) ただしこれは開設当初の配置。国際問題研究所の入っていた部屋はその後借主が替わり、左側の研究室も何度か配置換えが行われたようである。
- (26) この時点では研究所の事業としては組み込まれていない。注(三四)を参照。
- (27) M. Bloch, 'Institut de recherche historique de Londres', *Revue historique* 138, 1921, pp. 157-158. なお日本語訳については北濱佳奈氏 (慶應義塾大学大学院博士課程) に御教示を仰いだ。
- (28) ブロックの思想に関する邦語文献は多数存在するが、さしあたり二宮宏之『マルク・ブロックを読む』(岩波書店、二〇〇五年)を参照。より詳細に業績を述べた伝記としては、Carole Fink, *Mare Bloch: a life in history*, Cambridge, 1989. (河原温訳)『マルク・ブロック：歴史のなかの生涯』平凡社、一九九四年)を参照。
- (29) Parsloe, op. cit., pp. 277. ポラードとは違いミークルは親しみやすい性格だったようである。毎日曜には研究所の職員や若手の研究者を自宅に招いて歓談する機会を提供していた。
- (30) *A Plea for the Institute of Historical Research*, 1926, p. 5.
- (31) Parsloe, op. cit., p. 278. 余談になるが、ベヴァリッジは著名な経済学者であり、彼が一九四一年にまとめた「ベヴァリッジ・プラン」は戦後イギリス社会保障制度の基盤をなした。一連の功績により、後に初代ベヴァリッジ男爵に叙されている。またトニー (R. H. Tawney) は彼の義弟に当たる。
- (32) Parsloe, op. cit., p. 279.
- (33) ポラードはカリスマ性を有してはいたが、他人からの批判を受け入れるタイプの人物ではなく、親近感を抱かれることはほとんどなかった。彼がこうした性格であったために、研究所の運営に際してデーヴィス、ミークル、パスルーにかなりの負担がかかっていた事実は否めないようである。Galbraith, op. cit., p. 265.
- (34) ここで『ヴィクトリア女王記念州史』について少し触れておきたい。イングランドの各州の歴史をあらゆる分野に渡り詳細に記述するというこの他に類を見ない大規

模な計画は、一八九九年に出版が開始されヴィクトリア女王に献上されたことからその名をタイトルに冠している。当初は売り上げによる利潤で調査研究費を賄おうとしたようであるが、出版費用と利潤との間の大きな格差のため早くも一九二〇年代には財政難に陥り、歴史学研究所の一事業に組み入れられた。研究所では各州からの助成金を募ることで出版を継続し、今日まで事業は存続している。現在までに一五州に関するものが完成し、一四州が進行中、二州が再開計画中、一二州が休止中となっている（ただしヨークシャーは州全体、イースト・ライディング、ノース・ライディング、ウエスト・ライディングとヨーク市のそれぞれについて研究が行われている。二〇〇五年現在）。近年は思うように助成が得られず、出版は滞りがちである。史料的价值に関しては、出版された年代や州毎に史料の質にはらつきがあり、一概に全てが有用であると言えないのは残念である。なお現在の情報に関しては公式ウェブサイト (<http://www.england-past.net/>) を参照されたい。

(35) Harte, *op. cit.*, pp 218-221.

(36) Parsloe, *op. cit.*, p. 282. その後間もなくポラードには痴呆症状が表れ始めたようである。公的な場には姿を見せなくなつた。没したのは一九四八年八月三日である。こうした晩年における負の側面が、今日までポラード個人の評価に大きな影響を与えている感は否めない。

(37) フラウアに関しては、D. L. Evans, 'Sir Cyril Flower, 1879-1961', *Proceedings of the British Academy* 48, 1963.

「歴史学の実験室 (Laboratory of history)」

を参照。

(38) ガルブレイスの簡単な略歴は、A. G. Dickens, 'Vivian Hunter Galbraith, 1889-1976', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 50, 1977. に紹介されている。さらに極めて詳細な紹介は、R. W. Southern, 'Vivian Hunter Galbraith, 1889-1976', *Proceedings of the British Academy* 64, 1980. を参照。

(39) 「ルンビュース」は、R. A. Humphreys, 'Alexander Taylor Milne, 1906-94', *Historical Research* 67, 1994. を参照。

(40) A. T. Milne, 'Twenty-five years at the Institute, 1946-71', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 44, 1971, p. 285.

(41) 第二次大戦後の歴史学研究所については、Milne, *op. cit.* の他、S. R. B. Smith, 'The Institute of Historical Research, 1971-96: its third quarter-century', *Historical Research* 64, 1996. を参照。一九八六年から一九八七年度の活動を簡単に紹介したものととして、亀山潔「ロンドン大学歴史学研究所と一九八六-八七年度の事業概要」(『政経論叢』国士館大学) 六二号、一九八八年) がある。近藤和彦「ブルームズベリの歴史学」(Ⅱ) (『UD』二九〇号、一九九六年) は現代におけるセミナーの雰囲気伝えている。また現在の事業内容については歴史学研究所のウェブサイト (<http://icbh.ac.uk/>) を参照されたい。

(42) エドワーズに関しては、Sir Goronwy Edwards, 1891-1976', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 49, 1976; J. S. Roskell, 'John Goronwy Edwards, 1891-1976',

Proceedings of the British Academy 64, 1980. を参照。

- (43) このリストの基礎となる調査を最初に行ったのは一八世紀の尚古学者ニーヴ (John Le Neve) である。ニーヴが残した史料 (*Fasti Ecclesiae Anglicanae*) に依拠して、一九世紀にハーディー (T. D. Hardy) がこれを三巻本に編集した。王立歴史学協会から依頼を受けて研究所が行ったのは、ハーディーの史料に基づく再編集である。時代順に三シリーズ (一・一〇六六―一三〇〇年、二・一三〇〇―一五四一年、三・一五四一―一八五七年) の刊行が予定されている。二〇〇五年までに第二シリーズは完成し、第一シリーズは九巻まで、第三シリーズは一巻までが出版されている。

- (44) 歴代の議会議員の経歴を全て調査するというこの野心的な試みは、元来戦前にマクドナルド内閣で閣僚を務めたウェッジウッド (J. Wedgwood) が企画したものであった。資金が得られず中断していたこの計画を、戦後歴史学研究所が引き継いだのである。当初編纂は研究所内で行われていたが、現在の拠点はタヴィストック・スクエアにある別館に移転している。『議会史』 (*History of Parliament*) は議会史財団 (History of Parliament Trust) の手によって出版されており、二〇〇二年までに一三八六―一四二一年、一六世紀、王政復古から一八二〇年までの下院について各シリーズが完成している。その他の時代と貴族院についても研究が継続して行われている。議会史財団のウェブサイト (<http://www.history.ac.uk/hop/>) を参照。

- (45) ウームルトについては J. Brown, 'Francis Wormald, 1904-1972', *Proceedings of the British Academy* 61, 1976. を参照。

- (46) 一九七二年に大蔵府の官職者リストを皮切りに、一九九八年までに一二巻が出版され、一応完結したようである。

- (47) デイケンズに関しては、G. Williams, 'Geoffrey Arthur Dickens (1910-2001)', *Renaissance Studies* 16, 2002. を参照。宗教改革をめぐるデイケンズの議論とその後の展開については、さしあたり指明博「第二章 宗教改革」(岩井淳・指明博編『イギリス史の新潮流 修正主義の近代史』所収) を参照。

- (48) トムスンには数多くの著作があるが、初期の代表的な作品として F. M. L. Thompson, *English landed society in the nineteenth century*, London, 1963. を挙げておく。

- (49) このセンターは、その成り立ちから今日に至るまでのロンドンの特徴と発展について研究と多様な評価を行い、他の大都市との比較における広い文脈にロンドンの歴史を関連づけることを目標としている。詳しい事業内容については、ウェブサイト (<http://www.history.ac.uk/cmh/>) を参照。

- (50) この研究所はそれまでイギリス国内で軽視されがちであった第二次大戦以降の歴史に目を向けるべく、一九八六年に創設されたものである。現在の事業内容についてはウェブサイト (<http://icbh.ac.uk/>) を参照。

- (51) ブラックウェル社 (Blackwell Publishing) への出版

社の変更に伴うもの。

(52) オブライエンは現代イギリスを代表する経済史家であり、E・ウォーラステインの「世界システム論」に對抗して西欧からの帝国主義の再認識を試みている。邦語文献としては次を参照。パトリック・オブライエン、秋田茂・玉木俊明訳『帝国主義と工業化一四一五〜一九七四——イギリスとヨーロッパからの視点』（ミネルヴァ書房、二〇〇〇年）。本書は論文と講演を四本編んで訳出したものである。

(53) キャナダインには産業革命期以降における貴族の衰退を扱った諸著作がある。D. Cannadine, *Lords and land-lords: the aristocracy and the towns, 1774-1967*, Leicester, 1980; Id., *The decline and fall of the British aristocracy*, London, 1990. その他近年は現代における歴史認識の問題にも関心を向けてゐる。D. Cannadine, *History in our time*, London, 1998; Id., *Ornamentalism: how the British saw their empire*, Oxford, 2001 (平田雅博・細川道久訳『虚飾の帝国——オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ』日本経済評論社、二〇〇四年); Id(ed.), *What is history now*, Basingstoke, 2002 (平田雅博・岩井淳・菅原秀二・細川道久訳『今、歴史とは何か』ミネルヴァ書房、二〇〇五年)。なお歴史学研究所長に就任する直前のインタビューが *History Today* 誌に掲載されてゐる。D. Snowman, 'David Cannadine', *History Today* 48, 1998.

(54) なお、多様化する業務に対応するため次長職は一九九二年から六九年ぶりに秘書職と司書職に分離されている。

またグラスゴー大学の中世史教授であるベイッ(D. Bates)が二〇〇三年九月から新所長に就任している。

(55) 詳細はD. Adelson and R. Smith, 'Videotaped Interviews with British Historians, 1985-1998', *Albion* 31, 1999. を参照。

(56) Pollard, *Factors in Modern History*, p. 287.